岩手県における食物費調査に関する一考察

後　藤　和　子

A note on the Research into the Expenditure on Food in Iwate prefecture

KAZUKO GOTO

ま え が き

わたしたちはいま，情報化社会ともよぶべき新しい社会に直面しつゝある。消費文化とマスコミの発展にともない家庭への消費情報の流入がますます激しくなるものと考えられる。豊かさの増大や選択自由度の増大の中で生活の方向感覚を見失うことのないように家計管理の正しい理念を確立し，その上で生活技術の向上や余暇の有効利用など総合的な生活計画を家庭の側において確立することがぜひ必要と考えられる。

家計管理の目標は消費の充実と生活の安定であるといわれているが，究極において家族が健康で文化的な生活を維持向上することにあると思う。それにはまず家計費のなかで食費を優先させ食生活の充実をはかることが大切である。しかし現実には生活必需的支出のウエイトが年々さがり，これがエンゲル係数の低下となって現われている。食生活の内容が実質的に向上しないで係数が低下するのであれば，栄養摂取において問題であり，食物費の支出を反省し改善のための検討が必要になってくる。

従来から食生活に関し栄養学的な研究は数多くなされてきているが，食生活の経済的な面での研究は少ない。これまで家計費に関した研究は，家計費構造に関する[1]傾向分析や，[2]類型分析，又は家計費調査による[3]費目別構造分析等の研究であって，家庭の食生活を基盤にした食物費分析はほとんど例をみない。私はこの点に着目し地域の家計費実態調査から特に食物費についてとりあげ

1．都市と農村との食物費構成上の特質
2．食生活の経済的水準
3．食物費の家計上の問題点

等を明らかにするため食物費の構造分析を行なったので一端をこゝに報告したいと思う。

I 調査対象および方法

1 調査対象

県内，都市家庭として，盛岡市の一般消費者家庭を，農村の家庭として，山村地域と平地農村地域[4]からそれぞれ軽米と江刺の農家を選定した。

---

1) 伊藤秋子：戦後日本の家族経済における消費構造の分析，1959～1960年　家政学雑誌　第11巻　1～5号
2) 鹿股寿美江：農家の家計構造に見出される3つの類型について，1960年　家政学雑誌 第11巻　1号
3) 吉村和子：生活費調査の試み，1955年　家政学雑誌　第4巻　第4号
4) 農林省統計調査部の経済地帯区分による

軽米町は県の北部にあって気象条件にめぐまれず，主として畑作中心の農業が営まれている。江刺市は県南の穀倉地帯で自然条件にめぐまれ，主に水田中心の農業を営み農業所得は比較的安定している。農村の調査地域について社会的環境を第1表にしめす。

第1表 調査地域の社会的環境

項目 ＼ 地域		軽米町	江刺市
総農家数	戸	2,019 (100.0)	6,104 (100.0)
農家人口	人	11,583	31,037
専業農家	戸	812 (40.2%)	1,422 (23.3%)
兼業農家	戸	1,207 (59.8)	4,682 (76.7)
農業が主	戸	713 (59.1)	2,743 (58.6)
兼業が主	戸	494 (40.9)	1,939 (41.4)
経営耕地面積	a	251,201 (100.0)	661,641 (100.0)
田	a	78,666 (31.3)	506,911 (76.8)
樹園地	a	8,833 (3.5)	16,015 (2.4)
畑	a	163,702 (65.2)	138,715 (20.8)
出稼者	人	860	1,203

昭和43年岩手統計年鑑・岩手県企画部統計調査課
( ) 内の数字は率をあらわす

2 調査の期日

元来この種の調査は，毎月実施するのが理想であるが，記入を依頼しても不可能であったので年間に（(6.9.11)月）の3回を選定して実施し，之によって，1ヵ月間の平均を推論した。

3 調査の内容

(1) 家族構成
(2) 1ヵ月当り収入（税金を除く）
（臨時収入は含めない）
(3) 家計費内訳
食物費
被服費
住居費
光熱費
雑費
(4) 食物費の内訳

4 記入の方法

食物費の内訳については，毎日，購入食品名と価格を1ヵ月間けい続して記入させた。農家の場合は自家生産物の消費と，現金購入とをわけて，現物消費は地域での小売価格に換算した金額を記入させた。

以上の方法で盛岡市の一般家庭20世帯を無作為にえらび，記入をお願いした。農村の場合は，調査地の高校家庭科の先生に依頼し，農家からきている女生徒を介して家庭に記入をお願いした。

5　調査上の問題

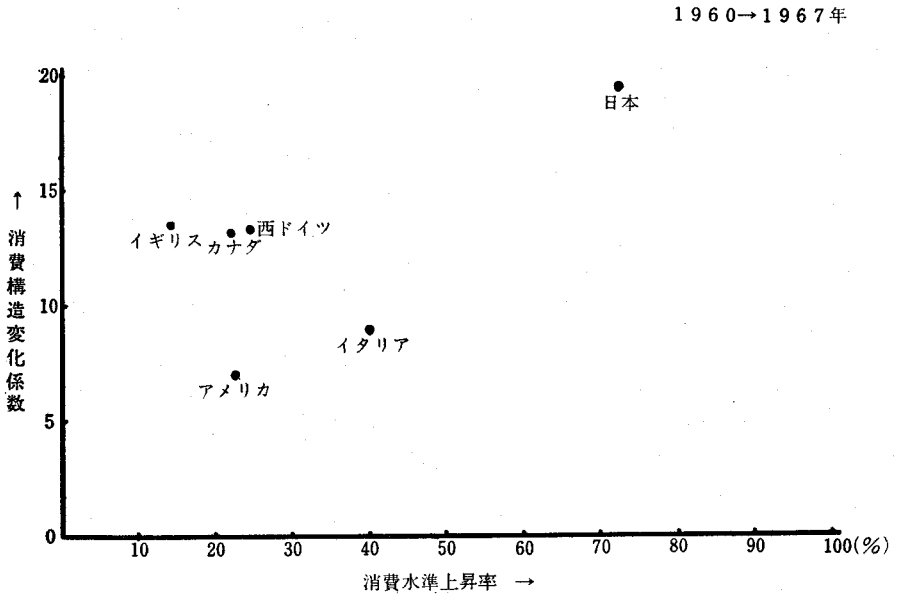
1カ月間の継続記入は困難であること。被調査者になることをさけたがる人が多いこと。家計に関することは公開したがらない家庭が多いこと等，組織的におこなわれる調査とちがって，個人の能力では限界があり資料回収の点でかなり問題のあったことを，おことわりしておきたい。以上の調査結果と，都市世帯の全国家計調査の資料[5]，および農家経済調査[6]の資料を参考として考察をこゝろみた。

II　調査成績とその考察

1　家計費の変化と問題点

1960年代のわが国経済の大きな福祉目標であった，国民の所得水準の上昇という課題は，急速な経済成長のなかで次第に達成されてきた。そしてわが国の消費水準は，著しい消費構造の変化をともないながら急速に上昇し，第1図の如く昭和42年までの7年間に約70%上昇するとともに，消費構造は欧米主要国に比べて，はるかに大きく変ぼうしてきている。[7]

第1図　消費構造の変化と消費水準の上昇（国際比較）



家計費構造の特徴を第2表[8]の生活必需係数によってみると，食料費，光熱費，家賃，地代などの生活必需的支出のウエイトが昭和38年に比べていずれの収入階層においても低下し，平均2.7ポイント下っている。それだけ選択的随意的な支出が増加していることである。すな

5) 総理府統計局：家計調査年報　昭和43年
6) 1. 岩手県農務部：農家経済報告書　同上
2. 農林省岩手統計調査事務所：岩手の農家経済　同上
7) 経済企画庁：経済白書　日本経済の新しい次元　45年版　p 189～190　参照
8) 経済企画庁：経済白書　45年版

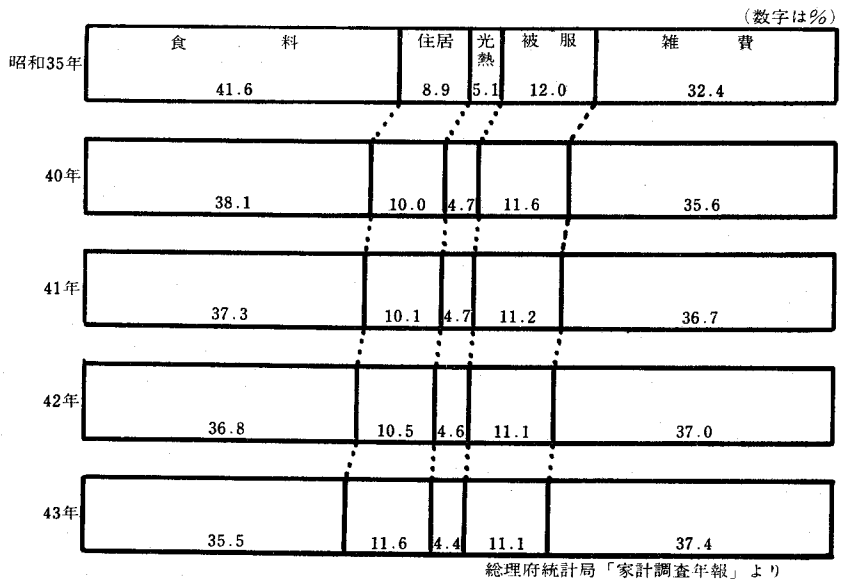
わち，その内訳をみれば食料費の支出低下が大きくあらわれている。昭和 38 年から 43 年の 5 年間に食料費の割合は 3 ポイント下っており，生活必需係数の低下は食料費支出割合の低下が大きく影響していることがわかる。

第2表　全国勤労者世帯所得階層別生活必需係数（試算）

年間収入 5分位階層	生活必需係数* %			内訳 食料費以外の支出 %			内訳 食料費支出 %		
	38 年	43 年	差	38 年	43 年	差	38 年	43 年	差
平均	61.1	58.4	△ 2.7	23.4	23.7	0.3	37.7	34.7	△ 3.0
第 1 分位	69.3	65.7	△ 3.6	26.1	26.5	0.4	43.2	39.2	△ 4.0
第 2 分位	65.1	62.8	△ 2.3	25.2	25.3	0.1	39.9	37.5	△ 2.4
第 3 分位	62.5	60.1	△ 2.4	24.5	24.9	0.4	38.0	35.2	△ 2.8
第 4 分位	60.0	56.8	△ 3.2	24.2	24.1	△ 0.1	35.8	32.7	△ 3.1
第 5 分位	56.4	53.3	△ 3.1	24.9	24.3	△ 0.6	31.5	29.0	△ 2.5

備考　1)　総理府統計局家計調査より作成
　　* 2)　食料費，家賃，地代，水道料，光熱費，洋服，保険医療，環境衛生，教育，文房具及び仕送金の合計の消費支出全体に対する比率

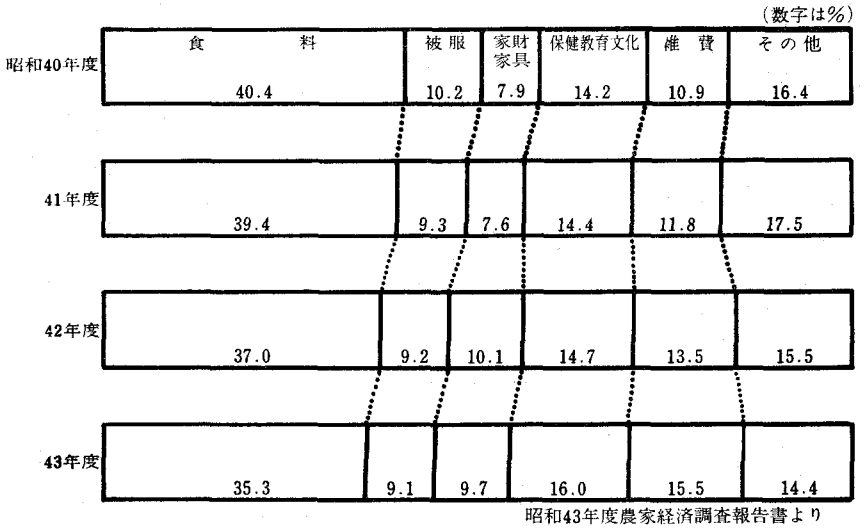
第2図　全都市全世帯の年平均1か月間の家計費構成の推移



総理府統計局「家計調査年報」より

以上の傾向を第2図，第3図にしめす家計費構成比の推移でみると，農家，都市家庭ともに共通した特徴的な点は，食料費が年々減少していること，住居費が増大していること，雑費が増大していることがみられ，これによっても必需的，基礎的支出より随意的な支出の増加が明らかである。つぎに第3表によって費目別の増加率をみると，昭和 43 年においては，消費支出全体の伸びよりも高い増加率を示しているのは，住居費と雑費であり，食料費は光熱費とともに他の費目に比べて伸び率が低い。

第3図　農家の家計費構成比



昭和43年度農家経済調査報告書より

第3表　費目別消費支出の対前年の増加率　(%)

	40年	41年	42年	43年
消費支出	8.8	8.5	8.7	11.5
食料費	9.0	6.2	7.2	7.5
住居費	8.6	9.9	13.1	23.2
光熱費	11.5	7.9	7.2	7.2
被服費	5.3	5.3	7.6	11.1
雑費	9.5	11.8	9.5	12.6

備考　総理府統計局家計調査年報より，全都市全世帯

住居費の中には，家具什器費が含まれているが，昭和30年代以降の大衆消費時代において，電気製品，家具といった耐久消費財の普及が大きく影響しているものと思う。又雑費支出についてはいろいろな費目が含まれているが，一般にレジャー時代の到来とそれに関連する支出の増加として理解されている。

以上のような消費の動向は全体の趨勢として所得の上昇に支えられ，規格化されたなかで流行に同化しながら生活の向上を求めて，より健康で文化的生活をねがう消費者が耐久消費財の家具やレジャ　的支出に多くの支出をするようになった消費者行動の変化をあらわしているものといえる。そのこと自体はなんら否定されるべきことではないが，家計費は食生活のような基礎的消費の充実がなされた上で他の生活向上のために消費されるべきものと思う。よくエンゲル係数の低下が生活向上のシンボルのようにいわれるが，構成比の推移にみられるようなエンゲル係数の低下が，はたして栄養が充実されたうえでの生活のゆたかさをあらわすものであるか，考える必要があると思われる。第4表の生活水準の比較をみてもわが国では食生活水準がきわめて低いのである。日本のエンゲル係数は欧米先進国並の数字をしめしているが，(第5表）栄養の水準はアメリカ，ヨーロッパに比べるとはるかに劣っているのである。(第4図)

生活様式は同じように見えながら，その内容は千差万別であって家計に支えられてそれぞれの家族のくらしがあり，家計の内容によって家族の個性が培われてゆくことは事実である。家

第4表　主要国の生活水準とその構造　(1960)

	被服	食料	住宅
アメリカ	100.0	100.0	100.0
イタリア	45.2	77.5	24.9
イギリス	77.4	97.6	72.6
フランス	66.3	91.0	48.8
日本	68.5	64.7	29.1

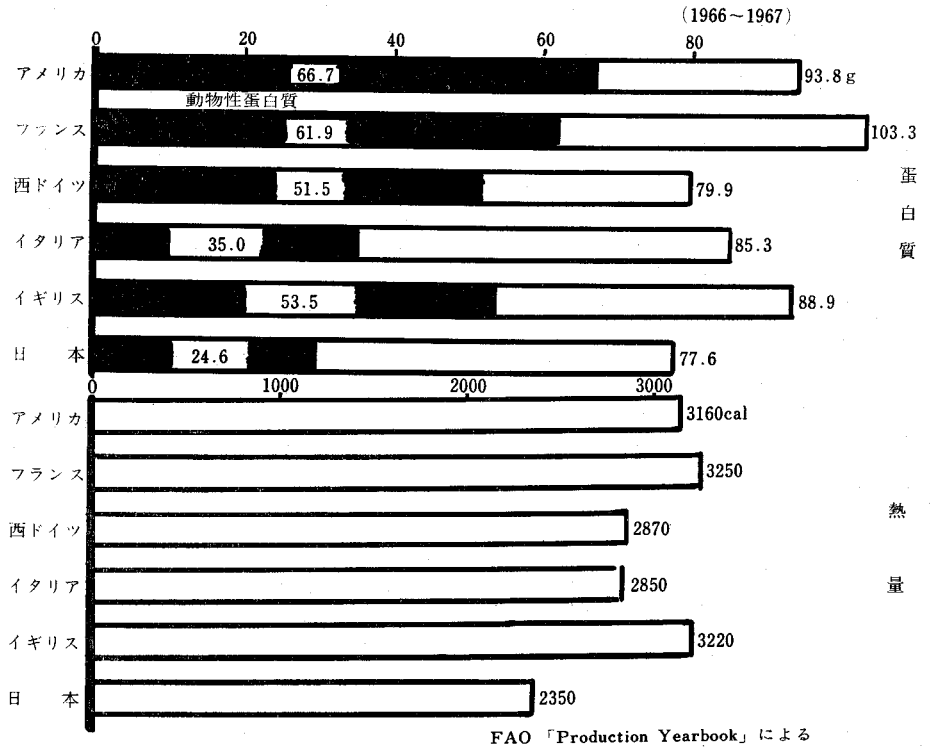
国民生活白書　39 年版
被　服……1 人当り繊維消費量
食　物……平均カロリー摂取量　動物蛋白摂取量
住　宅……1 部屋当り居住人員　上水道普及率
千人当り自動車所有台数
1 人当りエネルギー　家庭消費量

第5表　主要国の消費支出構成　(%)

	年度	飲食費	住居費	光熱費	被服費	雑費
日本	1963	39.3	10.2	4.4	12.5	33.6
アメリカ	1960～1961	26.3	17.7	3.9	9.5	41.5
フランス	1956～1957	42.7	10.5	6.5	10.8	29.5
西ドイツ	1962～1963	36.8	17.7	4.1	13.5	27.9
イギリス	1964	33.0	16.7	6.3	9.2	34.8

ILO「国際労働経済統計年鑑」による

第4図　1人1日当り栄養摂取量の国際比較



FAO「Production Yearbook」による

族の健康を増進し家庭生活のたのしみを豊かにするために食生活を重視することが重要なことと思う。そのためには，家庭生活の重要費目として食費を考え，許される枠内でいかに栄養的満足を与えるか，嗜好を通して家族の満足をはかり，食卓を囲む団らんから家族の精神文化を高めてゆく，そうした食生活の管理にならなければならないと思う。食費を犠牲にしてまで生活向上への意欲を家具やレジャー消費にむけることはあやまりであって，家計管理に確固とした姿勢を見失ってはならないと思う。

2　農家の食料費支出の実態

調査した6月，9月，11月の調査資料により各世帯毎に収入，家計費，食物費を集計し，1ヵ月当りの金額を算出し，比較を明らかにするため家族数の差異を消費単位に換算し1人当りの金額を求めた。更に栄養摂取と関係のふかい主食と，動物性食品の消費支出割合を求め，軽米と江刺の農家についてまとめたのが第6表と第7表である。

食物費の構成を規制する要因は，各家庭の収入高，家族数やその構成，主婦の食生活に対する意識，家族の嗜好，食品の買い方，選択の巧拙などさまざまな条件によると思われる。1人1ヵ月当りの金額でみると，農家の家計費は多くの家庭が1万円以下という少ない金額をしめし，7人というような家族数の多い家庭の家計費は6，7千円ときわめて少ない。食物費は5千円以下がほとんどで中に1万以上という特殊な家庭がみられる。

家計費が比較的高額であるのに，食物費はきわめて低い家庭もあり，又食費内の主食費率と動物性食品費率においてもさまざまな形態をしめしている。

3　都市の食料費支出の実態

都市の場合も農家と同様に調査項目の集計結果を一世帯当り1ヵ月の金額及その内訳をあらわしたのが第8表である。

4　食料費構成の全体的考察

食物費は，各家庭の収入高や家計費総額によっても大きく影響されると思うが，これらとの関係をみることは，今回の少ない資料では明確につかむことはできないので，食物費を中心に，食料費構成の内容がどのような傾向を示すかについて考察する。

まず食物費の多少が主食費率や動物性食品費率に影響すると思われるので，それらとの関係をみる。

第5図によって食物費と主食費率との関係をみると，家庭により差が大きくかなりのバラツキはあるが食物費の少ない家庭が一般に主食費率が高くなっている傾向がみられる。食費が少なければ，安価で満腹になる穀類支出が多くなるのは当然と考えられ，都市の家庭に比べ農家にそれが明らかにみとめられる。

食物費と動物性食品費率との関係については第6図にしめすように主食費率ほど明らかな相関はみられない。都市家庭は一般に農家より動物性食品費率が高く，食物費の多少にかゝわらず20～40%の比率の中にちらばりがある。もちろん食物費が9千円以上の多い家庭では比率がめだって高くなっており，中には50%以上も動物性食品に支出している家庭もある。主食は熱量源としては比較的安価なものであるから，食費金額の少ない農家では，自家生産物の直接消費ということからも主食費率が一般に高くなっているものと考えられ，食費と主食費率との間には逆相関の傾向がみとめられる。

つぎに，第6表～第8表から各項の金額の平均をもとめ，第9表によって食生活の水準を各地域と比較してみる。

第6表 軽米の食物費

No.	家族数 人	収入 円	家計費 円	食物費 円	1人1ケ月[2] 家計費 円
1	7	51,029	49,418	20,064 (10,210)[1]	8,365
2	5	45,000	45,020	11,255 (7,255)	10,976
3	5	58,109	58,033	12,129 (6,020)	12,971
4	3	36,600	36,000	18,272 (11,646)	8,632
5	3	85,750	85,448	21,206 (5,000)	28,500
6	6	69,409	68,146	16,587 (6,300)	13,882
7	7	42,060	43,482	240,46 (15,082)	6,676
8	4	44,100	44,047	20,790 (15,240)	11,895

備考 1) ( ) 内は自給費　2) 内閣統計局の生計費消費単位（農村）より計算

第7表 江刺の食物費

No.	家族数 人	収入 円	家計費 円	食物費 円	1人1ケ月[2] 家計費 円
1	5	45,313	44,047	18,193 (6,490)[1]	9,589
2	5	104,230	95,030	17,015 (9,120)	21,095
3	4	46,314	45,850	15,610 (5,660)	12,066
4	5	490,11	47,140	17,748 (8,620)	9,821
5	7	52,213	50,800	22,143 (9,880)	7,459
6	3	672,12	63,600	33,595 (17,046)	22,736

1) ( ) 内は自給費　2) 第6表の備考 2) と同じ

第8表 一般消費者世帯の食物費構成の実態

No.	家族数 人	収入 円	家計費 円	食物費 円	1人1ケ月[1] 家計費 円	1人1ケ月[2] 食物費 円	エンゲル係数 %	主食費率 %	動物性食品費率 %
1	3	70,075	700,75	14,015	25,075	5,390	20.0	23.5	26.8
2	6	119,000	119,000	20,240	21,250	3,551	17.0	26.1	37.4
3	4	80,000	80,000	25,784	21,073	6,289	32.2	21.2	42.7
4	3	54,760	54,760	21,905	24,890	9,089	40.0	14.9	28.9
5	3	140,000	140,000	23,818	46,666	9,527	17.5	11.2	54.8
6	4	75,646	75,646	29,377	22,923	8,393	38.8	29.8	25.7
7	5	110,960	110,960	29,406	28,456	7,172	26.5	14.7	42.3
8	5	99,000	99,000	31,816	21,521	6,916	35.0	24.3	30.5
9	4	100,800	100,800	36,384	28,000	10,106	30.5	12.5	29.9
10	4	80,000	80,000	29,283	21,052	7,142	30.6	28.1	33.3
11	7	87,000	87,000	36,753	10,983	5,654	42.2	30.1	32.0
12	4	71,800	71,800	22,408	19,945	6,056	30.2	36.3	25.4
13	4	57,795	57,795	30,129	16,054	7,926	50.1	28.8	36.1
14	7	83,253	83,253	24,916	13,648	3,833	29.9	42.1	37.1
15	4	81,000	81,000	29,663	21,315	7,236	35.0	14.5	27.7
16	2	100,000	100,000	23,575	55,555	13,097	16.9	11.1	48.8
17	4	102,675	102,675	32,522	27,000	7,932	31.6	26.0	27.3
18	4	99,094	99,094	30,771	27,526	8,548	31.1	5.3	29.7
19	4	69,121	69,121	31,223	19,200	8,217	45.0	27.8	35.7
20	3	57,000	57,000	23,339	25,909	10,147	40.0	21.2	28.1

備考 1) 内閣統計局の家計費，消費単位を使用して算出した。
2) 内閣統計局の飲食費，消費単位を使用して算出した。

構成の実態

1人1ケ月[3] 食物費 円	エンゲル係数 %	主食費率 %	動物性食品費率 %	自給率 %	現金化率 %
3,096	40.6	35.4	29.4	49.2	50.8
2,680	25.0	62.9	9.7	64.6	35.4
2,581	23.9	47.4	16.4	49.6	50.4
4,043	49.9	24.1	33.0	36.9	63.1
7,070	24.7	26.3	23.3	60.6	40.0
3,280	23.9	35.9	23.5	38.0	62.0
3,604	55.3	51.7	21.1	48.7	61.3
5,331	47.2	67.1	9.9	73.7	26.7

3) 内閣統経局の食料費消費単位（農村）より計算

構成の実態

1人1ケ月[3] 食物費 円	エンゲル係数 %	主食費率 %	動物性食品費率 %	自給率 %	現金化率 %
3,790	25.3	27.5	17.9	34.6	65.4
3,892	19.0	51.6	16.4	55.4	44.6
4,218	28.6	30.9	19.9	36.4	63.6
3,692	26.6	37.7	21.8	48.5	51.5
3,024	43.4	25.9	32.5	44.6	45.4
11,200	51.0	18.7	29.0	50.7	49.3

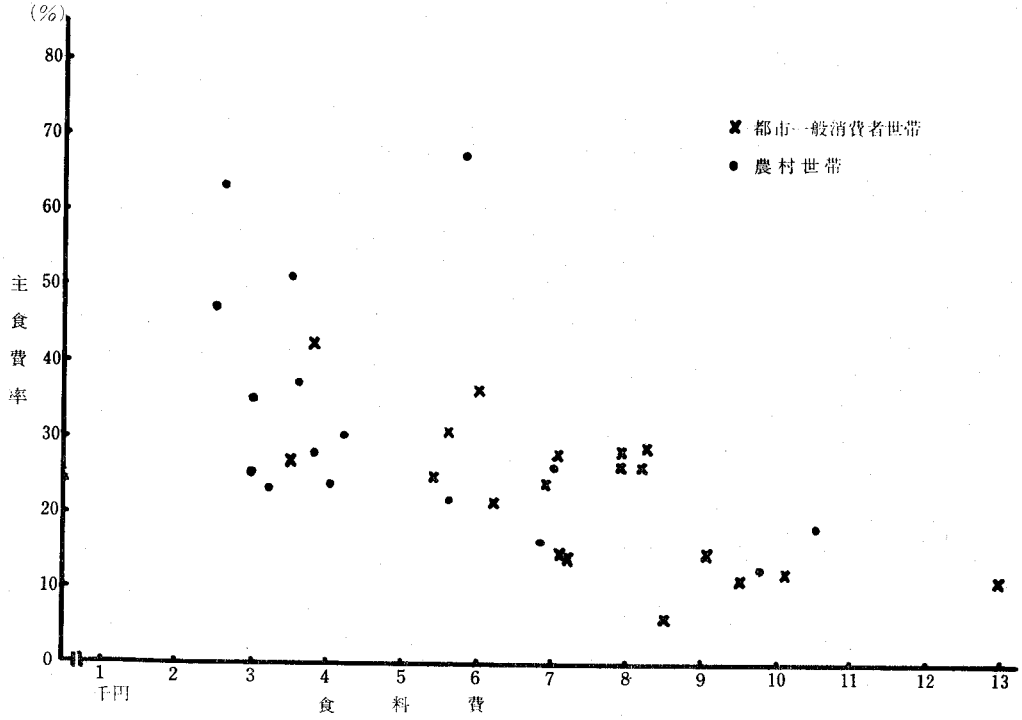
3) 第6表の備考 3) と同じ

同じ農家であっても軽米と江刺では格差があり江刺は，家計費および食料費の金額が多く従ってエンゲル係数も低率になっている。全国や東北の平均に近い水準をしめしており，ことに食費内容の主食率がどの地域の平均より低く，動物性食品費率が高くなっている。軽米の農家は食料費がきわめて少ないが，動物性食品費率は県内の北部地域に比べれば高くなっている。従って県内の農家でも県南の江刺は食生活の水準は高いものと思われる。同様に盛岡の都市家庭について食生活の水準を第 10 表によってみる。

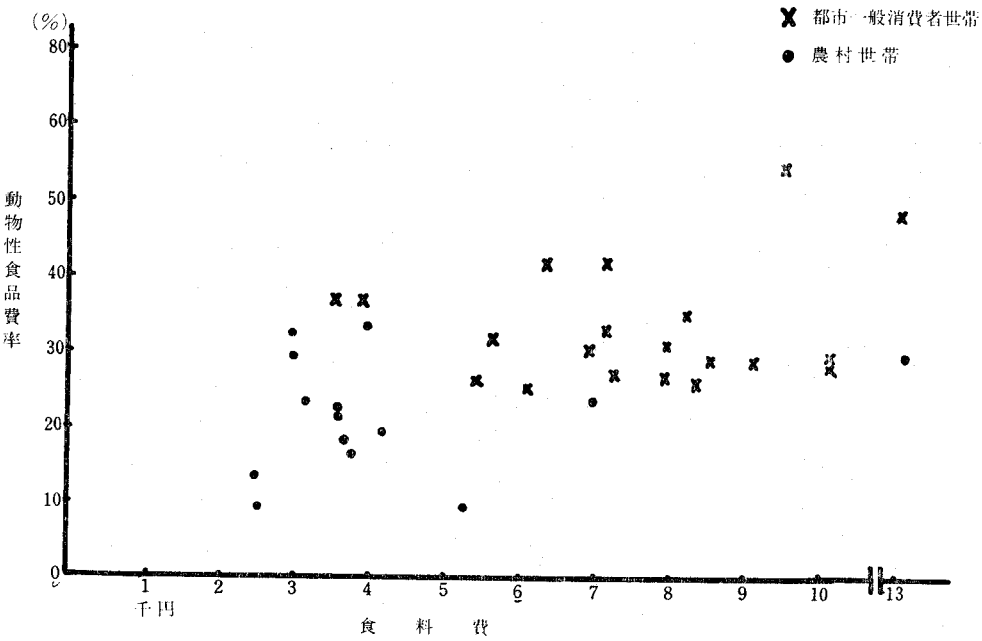
盛岡市の家庭においては，1人1ヵ月当りの家計費と食物費は全都市の平均に比較して金額が多くなっている。これは調査に協力してくれた家庭の収入水準が一般に高い家庭であったことによるものであると思われる。従ってエンゲル係数は低い比率をしめしており，数字の上からは全都市の平均より家計の豊かさをしめしていると考えられる。しかし，食生活自体の内容についてみると，食物費が多いわりに主食費の占める比率が高くなっている。また動物性食品費の比率においても全都市の平均に比べると少ない。従って食物の支出金額は多いが内容的にみると食品購入の上で問題があると思われる。以上のように食生活の水準指標からみて農家は都市に比べ低い。とくに軽米では1人当りの食物費が少なく県農家の平均額より 18% 近く低額である。食料費の充実は，健康維持のために大切な条件で食費の最低費用はいくらあったらよいのかを考えて家計のなかで適切な食物費をあてなければならないと思う。そこで第 11 表にしめすように1人1日当りの金額で比較してみる。

食料費価格の地域差はあるとしても1日当りの金額にはだいぶ差がある。とくに軽米は少ないがこれは現物消費の価格評価の点で記入上の不備があったのではないかと思われる。江刺は全国農家並の金額になっている。又盛岡がきわめて金額が多いのは，盛岡市の平均を上まわる

第5図 食物費と主食費率の関係



第6図 食物費と動物性食品費率の関係



第9表　食生活水準の比較

項目			全国[1]	東北[1]	岩手県[1]	北上川[1]流域	北部[1](県内)	較米[2]	江刺[3]
水準指標	世帯員1人1ケ月当り家計費	円	15880	14160	13234	14220	10590	12730	13890
	〃　食料費	円	4983	4875	4675	4690	4110	3961	4970
	エンゲル係数	%	31.4	34.4	35.3	33.0	38.8	36.3	32.3
	主食費率	%	35.4	38.3	42.3	41.1	45.5	43.9	32.1
	動物性食品費率	%	21.4	20.1	17.8	18.4	16.2	20.8	22.9
	自給率	%						52.5	45.0

1)　43年度　農家経済調査報告書より　年間より算出した金額
2)　44年度　8世帯平均
3)　44年度　6世帯平均

第10表　食生活水準の比較

区分 / 項目			盛岡市 44年	全都市 43年
水準指標	1人1ケ月当り家計費	円	24,900	15,878
	1人1ケ月当り食料費	円	7,610	5,690
	エンゲル系数	%	30.5	35.7
	主食費率	%	22.5	19.4
	動物性食品費率	%	34.0	35.5

備考　(1)　盛岡　20世帯平均　44年
(2)　総理府統計局，家計調査年報より

経済水準の家庭が対象であったからであると思う。それにしても今日200円以下の金額では，とうていバランスのとれた充分なる食事が摂取できないと思われる。食物費が少なければ高価な動物性食品や嗜好品への支出は出来るだけ節約し，穀類や野菜等に依存した食形態になる。このことから考えると農家の主食費率の高い理由はひとつには食費の絶対額の低さからきていることがわかる。軽米においてこの傾向が明らかにみられる。

昭和41年に「栄養を死守する最低線」としてだされた[9]大蔵省算出の食費を参考のためにしめす。

	1人1日当り食費
昭和39年度	150.04円
昭和40年度	167.48円
昭和41年度	186.87円
昭和42年度	205.24円
昭和43年度	*237.87円
昭和44年度	*250.95円

9)　税制改正の基礎になる生計費算出のための食料費　41年10月26日　朝日新聞掲載　成人男子軽労作1日当りの食費
*　全国消費物価指数より計算した金額

第11表 1人1日当り食物費

地 区	1人1日当り食物費	年度	備 考
軽 米	132 円	44年	調査の結査
江 刺	165	〃	
盛 岡	250	〃	
岩手県農家平均	153	43年	岩手の農家経済 1人当り年間食物費より計算
東 北 農 家	160	〃	岩手農林統計協会 S43年度 〃
全 国 農 家	164	〃	〃
岩手県全世帯	168	〃	岩手県統計年鑑 S43年 1世帯当り1ケ月食物費より計算
全都市全世帯	189	〃	家計調査年報 S43年

42 年度の大蔵省算出の費用 205 円をもとに，物価騰貴の影響を考えて算出した 44 年度の食費は 250.95 円となるが，この金額と前掲第 11 表の金額を比較すると盛岡の調査家庭のほかは，きわめて少ない金額であることがわかる。

5 食品費構成について

第 12 表は食品費の構成を一世帯当りの支出金額であらわしたものである。この表から特徴的な点をあげてみる。

(1) 主食としての穀類

軽米の農家は米の消費額が非常に多い。これに反し，都市は食パンや麺類の消費において農家よりも多くなっている。

(2) 野 菜 類

野菜の生産地といわれる江刺の農家は消費額が多くなっている。種類としては，淡色野菜の消費がいずれも多く，農家においては緑黄野菜の 2 倍，都市において 1.2 倍になっている。農家で摂取されている野菜は大根，玉葱。白菜，キャベツなど根菜類が多くなっている。都市の家庭はセロリー，レタス，ブロッコリー等西洋野菜も多く購入されている。品種の数をみると農家では淡色野菜が 8 種，緑黄色野菜は 4 種類購入されており，都市家庭では淡色野菜が 11 種類，緑黄色野菜は 7 種類と種類も豊富に購入されている。

(3) 動物性食品

農家において動物性食品は現金で購入する食品の中で一番高い比率を示すものであると考えられるが，動物性食品への支出額の半分近くが魚介類であり，都市に比べ肉類，乳類，乳製品の支出が少ないのが目立つ。農家で購入されている魚は，サバ，イワシ，イカなどが多く，また鮮魚よりもみりん干，乾魚，塩漬魚などに加工した魚が多いようである。こうした加工魚の支出額が魚類支出額の 65% で，残りが鮮魚である。一方種類も乏しく平均 7 種類くらいで都市家庭の 14 種類と比べて内容の豊富さに欠けている。卵は消費額が多く，農家にとって重要な動物性食品源になっていることが考えられる。いずれにしても都市と農村の食費の差がこれらの食品に大きくあらわれている。

(4) 嗜好品・加工品

一般に嗜好品は都市において支出額が多い。すなわち，飲物類，お菓子類，コロッケやギョウザ等の加工品といったいわゆる選択的な食品の支出額が多くなっている。この理由としては盛岡の調査家庭が食物費が多いためで食品の買い方にゆとりがみられる。しかし，県平均に比べると外食費・嗜好品等の金額にはまだ及ばない。

以上のような食品別の支出額を構成比でしめした第 7 図でみると，農家においては穀類費の比率がきわめて多く，動物性食品や嗜好品・加工品の支出割合やその食品の種類も少なく，バ

第12表　1世帯当り食品別支出額

地域 / 食品別	軽米	江刺	盛岡	全世帯県平均[1]
	円	円	円	円
主食	8,067 (7,175)	6,186 (5,260)	6,138	4,596
米	7,175 (7,175)	5,260 (5,260)	4,887	3,722
食パン	106	125	468	361
菓子パン	156	225	213	
麺類	214	252	412	513
その他	416	324	158	
副食品	7,697 (2,110)	11,153 (3,972)	14,464	9,341
芋類	195 (178)	211 (58)	444	2,155
緑黄色野菜	836 (425)	1,322 (968)	1,065	
淡色野菜 / その他の野菜	1,347 (670)	2,759 (1,607)	1,510	
豆類	7	5	88	
その加工品	616	704	497	
(計)	〔3,001 (1,278)〕	〔5,001 (2,633)〕	〔3,604〕	
生鮮魚介	995	1,589	2,603	1,907
加工魚	538	757	840	650
肉類	581 (24)〕	789 (210)	2,244	1,231
練製品	66	133	353	1,757
ハム・ソーセージ	250	232	721	
卵	835 (759)	13,62 (1,129)	864	
乳	212	152	1,255	
乳加工品	222	51	378	
(計)	〔3,699 (783)〕	〔5,065 (1,339)〕	〔9,258〕	
きのこ類	88 (49)	68	313	
海草類	233	116	406	
(計)	〔 321 (49)〕	〔 184〕	〔 719〕	
加工食品	676	903	883	1,641
嗜好品	1,265	678	4,100	4,300
調味料	962	2,046	1,993	1,146
外食	56	654	920	1,079
食物費合計	18,047 (9,309)	20,717 (9,469)	27,615	20,422

1)　岩手県統計年鑑　昭和43年　全世帯1世帯当たり1ケ月間の消費支出（県平均）より抜粋食品分類は調査家庭のものと異なる。

ラェテーの乏しい食費構成をしめしていることが分かる。

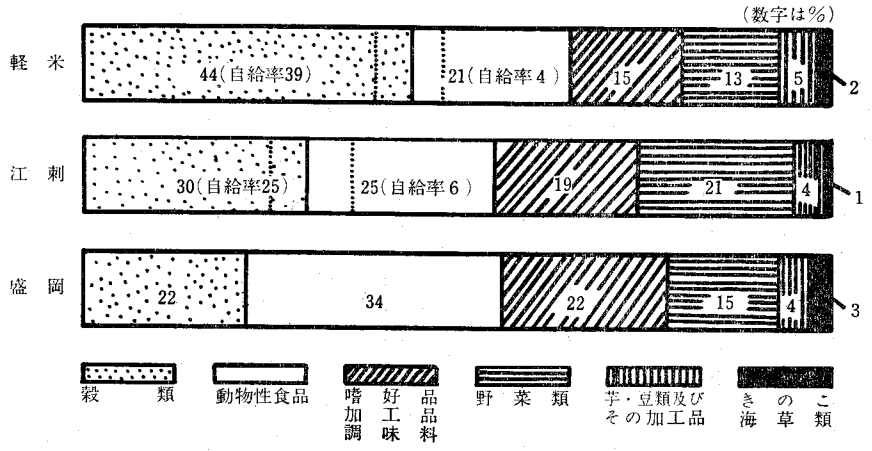
都市における食生活は米食偏重から脱皮して，多種多様の食品購入によって多様化の傾向を示してきている。すなわち，栄養的に必要な基礎的な消費よりも，選択的な消費（嗜好品）に向けられてくる傾向が，今後ますます増大すると思われる。

(5)　食費の試案

最後に前述した「栄養を死守する最低線」である1日1人当りの食費としていくら必要かを，盛岡市の[10]小売価格によって試算したものをしめす。(第 13 表)

10)　岩手統計年鑑　主要品目の小売価格より　S 43 年平均。
盛岡市内小売物価年間平均概況　盛岡商工会議所

第7図　一世帯当たり食物費支出構成



第13表　1人1日当り食物費のめやす　　(成人男子)

食品群別	摂取量[1] のめやす g	備考 A	備考 B	価格 A 円	価格 B 円
穀類	470	配・徳用	配・内地	46.06	66.27
芋類	80	甘しよ 50g じやが芋 里芋 30g	同左	8.95	8.95
砂糖	25			3.2	3.2
油脂	20	食用油	食用油 10g バター 10g	4.4	10.2
豆製品	80	とうふ 40g 油あげ 10g 納豆 30g	同左	11.3	11.3
魚・肉・卵	140	卵 50g 豚肉(中) 30g いか 60g	卵 50g 豚肉(中) 30g あじ 60g	51.16	52.96
牛乳・小魚・海草	90+10	牛乳 90g 煮干 5g わかめ 5g	同左	15.45	15.45
緑黄色野菜・果物	100	人参 50g ほうれん草 50g	同左	10.5	10.5
淡色野菜・果物	250	大根 100g キャベツ 50g リンゴ 100g	同左	13.88	13.88
調味料　塩	10			4.05	4.05
しようゆ	30				
嗜好品　果物	100		みかん		15.00
菓子	50		かわらせんべい		12.5
調味料			みそ 酢 化学調味料 その他		15.00
合計				168.95	239.26

1)　国立栄養研究所　速水決博士案　　栄養雑誌　第23巻第3号　S35. 5.

表中のA段階は最低の費用であって，食品の取り合わせを安価なものに限り，嗜好品等の費用も含まない金額である。食物は人間の慰楽の1つでもあるから，栄養を維持する最低の費用では現実の食生活はとうてい営むことができないと思う。

B段階の費用は，ぜいたくとはいえないまでも普通の食生活が営めるのではないかと思われる金額を示したものである。この金額の中には牛乳1本を毎日飲むものとして加え，ビタミン給源としての果物の外に，おやつとしての果物代と最低の調味料を補ったものである。しかし，この金額では十分なおやつや嗜好品は購入できない。さらに，香辛料やケチャップ等おいしく食べるための調味料代も加えて計算すれば，費用はさらに多く必要となる。

以上のことからみると，昭和43年の物価状態の中で1人1日230円程度の食費がなければ，とうてい栄養的にも必要なそして少しは楽しみのある食生活ができないように考えられる。さらに，1人1日当りの食費は1カ月にすると[11] 7000円となる。したがって，昭和43年には1人1カ月7000円程度の食費がいちおうのめやすとして考えられる。

昭和44年度は[12]物価指数の上昇から計算すれば1人1日当り約250円[13]となる。調査した盛岡市の家庭はその金額の水準に近い結果がみられるが，農家の場合はまことに食費の金額が低いのである。大蔵省算出の栄養を守る最低線の費用も，250，95円となっており，標準的な線と考えられる食費の金額は同じになる。岩手県のなかでは，水準の高い盛岡市の調査家庭においてさえ，十分といえる食費を食生活のためにあてゝいるとは考えられない。

ま　と　め

岩手県の農村と都市における食物費構成の実態から，その特質や問題点を明らかにすることを目的に考察し，大要次の点が明らかになった。

(1) 食物費は盛岡の都市家庭と農家ではかなりの格差があり，家計費に対する割合すなわちエンゲル係数は農家において全国水準に至っていない。とくに，県の北部軽米の農家は水準がきわめて低い。

(2) 食物費の金額の多少によって，主食費と動物性食品費の構成に大きな差がみられる。農家は主食費率が多く動物性食品費率が少なく，都市の家庭はその逆を示している。

(3) 1人1日当りの食費としてみたとき，栄養の最低必要量をみたすには，とくに農家は不十分な金額であり，家計管理上食費の充実がのぞましい。

(4) 食物費の多少が食品費の構成にも影響をおよぼし，農家は穀類消費が高く，都市は動物性食品費・嗜好品が多くなっている。

(5) 購入される食品の種類は都市の家庭は種類にバラェテーがあり，農家は種類が数種に限られ，食生活の内容が貧弱である。

以上盛岡の都市家庭では所得の増加と時代の変化の中で，食生活の多様化と高級化の現象が調査の実態からしめされてきているようであるが，農家（とくに県北）の場合は都市との格差があり，食費の水準が低く，主食本位の貧しい食生活であることが明らかになった。これは農家家計の特質ともいえる現金収入の不足からくる，現金支出の少なさといったような経済的水準の低さが第一にあげられると思う。

本稿は食物費構成の実態報告を主にまとめたが，家計費の中で食物費を規制している要因や食品購入のための消費者教育のあり方といった問題に広く発展させていきたいと思う。

---

11) 230円×365/12

12) 盛岡市　消費者物価指数（食料費）岩手県統計年鑑　昭和43年

13) 盛岡市における43年度食料費物価指数の増加率の実績から6%増加として算出した費用

おわりにあたり，ご指導ご助言を賜わりました本学鷹觜テル先生に，また調査資料回収にご協力いただいた軽米高校の倉田，江刺高校の下館両先生に，調査に協力した宇津木一枝氏に，さらにはご多忙のところ調査資料記入に協力をいただいた主婦の皆様に，心から厚くお礼申し上げます。

(1970 年 8 月 31 日受付)